

ジャイアンツ

阿部慎之助 熱く語る 中大の思い出、 プロ3年目の自信

プロ野球開幕——。巨人軍・阿部慎之助捕手は、ことしも母校・中大グラウンドでの自主トレでプロ3年目のスタートを切った。「やっぱり1番長い間お世話になったところだし、慣れたグラウンドだと落ち着いてやれますからね」と原点の土を踏みしめるように。昨年の暮れには講演も行い、中大生を改めてトリコにしたところでもある。昨年日本1の原動力となり、そしてことし、ゴジラ・松井なきあとの巨人の命運を担うか。自信に満ちた「サヨナラ慎ちゃん」のマルチ・レポートである。

学生記者 小野光雄 十野倉早奈恵

1月7日——中大野球場 「めざすは日本1」

03年1月7日。阿部選手はあさ10時半すぎ、中大硬式野球場に姿をみせた。快晴、温暖。しかしバックネット付近から3塁側ベンチ前のあたりはまだ氷が張っていた。

報道陣のいるアウト・フィールドからは、外野の芝生がキラキラと光って見える。その感触を確かめるように、赤いトレーニングウェアを着た阿部選手が右翼から左翼までをゆっくり走る。何往復かして、ときに軽いダッシュも交える。そのあと中大野球部前副主将の佐藤章晶選手（当時経4）を相手に、キャッチボールやトスバッティング……1時間ほど汗を流して、報道陣の前にやってきた。

——今シーズンの目標は？

「ことしも日本一をめざします。個人的には去年と同じスタイルでやっていきますよ。技術的にも特に

変えようとは思っていませんね」

——松井選手がヤンキース入り。試練のシーズンですね。

「松井さんがいなくなつてジャイアンツはダメになった、と言われたくはないですからね。日本1をめざすと同時に自分も昨年以上の成績を出したい。まずレギュラーとしてフル出場、打率3割、ですな」

短く、自信の言葉が続く。笑顔、ユーモアもまじえて。まわりを明るくする雰囲気は天性のものだろう。

「話術も一流」中大出身の……」

昨年12月2日、クレセントホールでの講演会は、その魅力全開、ぶつちぎりの楽しさだった。

中大生を前に現れた阿部選手の第一声。

「ジャイアンツの阿部です。ずっとマスコミがいますけど言いづらいことも言いますので、みなさん聞いてください。今日は超満員ですけど（実際は会場のクレセントホールの

客席7割くらいの入りだった)、楽しく過ごしていただきたいと思えます。中央大学を卒業して、いない阿部です」

ドツと沸く会場。大きなずっしりとした声と、ユーモアを交えた話しぶり。ハナから中大生の心をわしづかみする妙である。

当意即妙に、司会役の日本テレビ・吉田慎一郎アナが応じる——「実況するわれわれは、そのところを、中大出身の阿部選手、と紹介するわけです」

就職部主催の講演会。野球選手と実況アナ、独特のかかわりと「現



花束贈呈に満面の笑み(左は小林杏奈さん)

場感覚」をベースに快調なテンポでトークが続いた。阿部選手は舌も滑らか、全編ざつくばらんに。

大学時代の思い出は、と聞かれると、「学食のソフトクリームばかり食べてました。金曜日の抹茶アイスがおいしかったことを覚えている。元気が出るのは“鉄板”もの。ステーキとか、ハンバーグ。朝8時45分に朝食を食べて、10時から2時間練習をする。帰ったら風呂に入っていましたね」

風呂には格別のこだわりがあるらしい。寮時代も風呂掃除だけは手を抜かずに行っていたという。会場にいた中大野球部の後輩に風呂掃除の指導をしていたエピソードも披露。「大学3年のときにアマチュアからプロのキャンプに選んでいただいていたプロとやった。その中で自分の方が勝っていると思う部分も感じました」

自分もやれると、プロを初めて意識した時、である。

「プロ野球は魅せるとともに見られるというのがある。見られるという中でいい緊張感が生まれるし、その緊張感があるからこそ、いいプレーができる」

02年ベストシーン

01年、ルーキーの年は多くの困難にぶつかった。02年、生まれ変わったように、日本1の原動力になった。

「巨人に阿部慎之助あり」——その活躍を日テレが特別編集したビデオも上映された。ベスト・シーンを振り返ってみよう。

△サヨナラ慎ちゃん▽

02年ペナントレース。天王山でもある夏場を迎えると清原、高橋、仁志らスタメン選手がケガで戦列を離れてしまう。早々にマジックが点灯した巨人に暗雲が立ちこめていた。そんな中、原監督は「3番阿部」を起用、カケにでた。

8月11日——ヤクルト戦。10回2

死で劇的なサヨナラホームラン。阿部選手は両手を力強く挙げて飛び跳ねながらベースを回った。それもそのはず、サヨナラホームランは阿部の野球人生でも初のこと。巨人選手としての東京ドーム通算1000号の記念すべきメモリアルアーチでもあった。

同じ週の8月15日——これもヤクルト戦。巨人・入来とヤクルト・藤井の緊迫した投手戦に決着をつけたのも阿部選手のサヨナラホームランだった。勝負強さをいかなく見せつける。

「最高です！」

お立ち台の満面の笑顔とともに、スポーツ紙に「サヨナラ慎ちゃん」の大見出しが躍った。その後巨人はリーグ優勝への道を着実に歩んでいくことになる。

△打率2・98▽

シーズン終盤には捕手としては巨人で初の3割打者になる可能性が



自主トレ初日＝中大野球場

あった。そのとき既に巨人はセ・リーグで優勝を決め、残りの試合は消化試合になっていた。残り4試合で3割をキープし、出場を見送れば3割でシーズンを終えることもできた。マスコミが騒ぎ立てる中、本人は出場に固持した。

「最後まで出ます。3割を打つことは素晴らしいけど、今は1試合でも多く出て経験を積みたいから」と。

今のことより先を見据えた、かたくなな意志。結局、阿部選手は残り試合に出場し、打率2・98でシーズンを終えた。

吉田アナの問いに、答える。「逆に打てなくてよかった。また目標にすればいいんですからね」

これも自信が言わせる、奥の深さである。

△日本シリーズを決めた刺殺▽

西武との日本シリーズ第1戦。初回、先頭の松井稼頭央に安打を許し、無死一塁となる。続く小関のバントを阿部選手は迷わず二塁へ送球した。みごとに、タッチ・アウト！

もしここで二塁がセーフとなったら、一気に流れが西部へ傾きかけたかもしれない場面でもあった。「あれで流れが変わった、決まった」と原監督以下が絶賛したプレーである。シリーズを巨人は4―0のストレート勝ちで制した。

第4戦、6―2で巨人リードの九回2アウト。最後の打者を前に阿部選手は目に涙を流していた。それまで4試合でわずか8失点と抜群の安定感を誇った。巨人の女房として頂

点に登りつめるその瞬間、何が阿部選手の心によぎっただろう。

中大時代には1年のときからマスクをかぶっていた。3年時の春には東都2部リーグで優勝。中大としては10年ぶりに1部復帰の立役者にもなり、キャプテンとしてチームを引っ張った。その間、シドニーオリンピックの日本代表としてもオリンピックに出場した。「オリンピックの経験は、すごく良かった。今度もチャンスがいただけのなら精一杯やります」と阿部選手は中大生の前でも強調した。

△防御率トップ3・02▽

「打てなくても守りがある。キャッチャーはいつもボールに触れているので気が抜けない。昨年(01年)はリーグ最低防御率(4・45)で、優勝も逃してくやしい思いをしました。ジャイアンツは絶対勝たなければならぬ球団なので、成績が良ければいいですが、ダメだとその

倍、叩かれる」

防御率は捕手の責任、と言うのである。2002年はリーグ1位の3・02。「阿部に任せておけば大丈夫」という、投手の、ナイン全員からの信頼感、それがなによりも大きい、と言う。本人の理想のキャッチャー像は「打てて守れるキャッチャー」である。

背番号「10」入団秘話

プロに入るときは両親ともめた、という話も披露した。巨人という球団とその意味。「僕が逆指名するときも腹の中では決めていたんだけど、なかなか親に言えなかった」

巨人に決めた理由のひとつ。「大卒4年のときにおばあさんが体調を崩して。元気になってテレビで見れる球団がいいなど。それもありませんでした」

阿部選手のやさしさでもある。父、阿部東司さんは「僕には絶対良くやったといわない。それくらい

敵しい親」だそう。02年の活躍を見て、言ったのは一言だけ。「来年は分かってるよな」と。

逆指名で巨人を指名した後のドラフト。どんな選手になりたいか、と聞かれた。

「球界を代表するキャッチャーに自分はなりたいたいと思っていますし、自分を試してみたいというのが強いです」とそのとき答えている。

背番号「10」を背負った巨人の女房役は、ベストナイン、史上最年少(23歳7カ月)でのゴールデングラブ賞受賞、セ・リーグ優勝、そして



プレス会見はりりしく

日本1。2年目で既に「球界を代表するキャッチャー」になってしまった。日米野球にも日本先発として選ばれ、メジャーを代表するB・ボンズやJ・ジアンビーの本塁打を最も間近で目にした。どこまで夢を實力でモノにしていくか――。

なれたらいいな

「中大野球部監督」 ——独占インタビュー

自主トレ初日。プレス・インタビューのあと、阿部選手を直撃した。以下は、『Hakumonちゅうお



本誌会見はなごやかに

う」の独占インタビュー。

——阿部選手がいた頃と野球部の雰囲気は変わりましたか？

「いや、何も変わってないよ。でも、やっぱり1部リーグははずして欲しいくないね」

言葉のはしほしに母校の野球部に對する愛着が感じられる。

——将来の夢は「中大野球部の監督」なんですか？

「なれたらいいねって言っただけなんだよ。ずっと野球にかかわっていか、もしくはまったく野球から離れたいね。畑仕事とかやってさ。家庭を持つたら大事にしたいしね」

——お墓参りをかかさないとすね

「うん、両親にも先祖を大事にして、言われてるしね。お墓参りに行って報告をしたり、ケガをしないようにお願いしたり。君たちも墓参りして損はないと思うよ」

蓮池さん招待したい

——蓮池薫さんを東京ドームに招待したいと聞いたのですが。

「一度メディアでそういう気持ちをお話しました。ただ僕からは連絡を取りようがないから、今のところどうにもならないんだけどね。蓮池さんのほうからお話があればぜひ招待したいですよ」

——大学生活を一言で言うとき「野球。……勉強」にしてもいいよ。あ、ジョークで

——新人生に向けて一言。

「この大学はやっぱ環境がすばらしいと思う。スポーツをするにしても勉強をするにしてもね。食堂もおいしいし。トム・ボーイのソフトクリームが好物だったなあ」

プロ球界を代表する捕手の、おちらかさと3重丸の笑顔。こちらは、元気のパワーをじかにもらったようないい気持ちである。女性記者は、つい写真まで一緒に、という舞い上がりようだった。